



みんなの水泳……日々徒然

第31回 日本身体障がい者水泳選手権大会見聞録 ～2020東京に向けて…徒然～

はじめに

前回は、10月に韓国のインチョンで開催されたインチョン2014 アジアパラ競技大会で見聞きたことや感じたことをお伝えしました。

今回は、第31回日本身体障がい者水泳選手権大会に参加して、見聞きたことや感じたことをお伝えしたいと思います。



開放感のある素晴らしい辰巳国際水泳場。広場の声が響き渡りました

日本身体障がい者水泳選手権大会とは…

11月8(土)～9日(日)(クラス分けは前日の7日実施)に東京辰巳国際水泳場で開催された第31回日本身体障がい者水泳選手権大会にクラスファイアとして、参加しました。

第31回ですから、ジャパンパラ大会よりも歴史のある大会です。

大会名には「身体障がい者」とありますが、近年では、出場資格や条件を満たせば、知的障がいのある選手も出場することができます。



大会恒例のリレー種目。クラブ対抗で非常に盛り上がりがあります

ジャパンパラ大会よりもその成り立ちが古いゆえ、数年前までは、パラリンピックやジャパンパラ大会とは異なるクラス分けシステムで実施されていましたが、現在ではパラリンピックやジャパンパラ大会に準じたクラス分けシステムと競技規則が適用されています(ただし、IPC公認大会ではありません)。

ジャパンパラ大会と比べると、年齢層の高い選手の出場も多く、シニアの種目設定があります。また、恒例のクラブ対抗のリレーも実施され、その予選・決勝は場内が非常に盛り上がりです。

今回は、2020年東京パラリンピックをめざして、若い選手層も増えてきているような印象を受けました。そういった意味では、水泳を介したファミリーの集いのような雰囲気を感じる大会ともいえますね。

2020東京に向かって…

2020年東京パラリンピックに向かって、これから日本全体で様々な準備をしていくことになるわけですが…、日本国内大会であるジャパンパラ大会にしても、この日本身体障がい者水泳選手権大会、また全国障害者スポーツ大会も、国際大会とは異なる部分があります。この連載でこれまでもお伝えしてきましたが、今回もこの点について、あらためてお伝えしておきたいと思えます。

国内大会が独自の運営方法をとることに異論はありませんが、「国際大会とどんな点がどう違うのか」については十分に把握しておく必要があると思います。

車いすの貸し出し

日本の大会では大会会場で、生活用車いすやシャワー用車いすの貸し出しをしていることがありますが、国際大会では基本的にこういった貸し出しはありません。自分の車いすにタオル等を敷いてできるだけ濡れないようにする、そんな感じですよ。

切断の選手で義足をつけている選手もそのままレースに登場し、泳ぐ前にはずします。レースが終わり、プールから上がれば、その場で義足を装着して退場していきます。



選手の車椅子を押したり、ゴールに運んだり、日本の大会では丁寧で細やかな介助・補助があたりまえとなっています。海外の大会では、この業務を担当する補助員がいないケースも稀ではありません

入退水介助・タッピング・スタート補助のボランティア

ジャパンパラ大会はじめ、国内の大会では、入退水介助のボランティアがいて、希望すれば入退水介助・タッピング・スタート補助などをしてくれますが、これも国際大会ではありません。すべて、自分のチームのスタッフでまかなうこととなります。

入退水や介助

前回にもお伝えしましたが、昨今では、S5やS6クラスの脊損選手でも、入退水介助は自国スタッフが1名で行うことが主流のようです。普段から自分でせざるを得ない状況が多いのかもしませんが、非常にタフで力強い選手が多いのでしょうか。日本は2名のスタッフで丁寧に入退水介助しているように見受けられます。丁寧でいいこと、なのか、「できることでも手伝っているね」なのか、ケースバイケースかもしれませんが、指導者としては、よく考えておく必要がある要素だと思います。

選手の介助でレースについていき、フィールドオブプレイに入ってから、「がんばれよ」とか「前半はおさえて」などの言葉がけをしたり、肩をポンポンとたたいたり、マッサージするようなしぐさをしたりすると、コーチング行為とみなされて失格になる場合もあります。何が介助なのか、必要な介助とそうでない介助は、など指導者も選手もよく考えておくことが大切です。



実際に抱えておろしているのは2名ですが、1人の選手に4名ものボランティアがお手伝いしているように見える光景。丁寧な気持ちで業務に取り組んでいるのは日本らしく、いいことではあるのですが、「こんなに大変なことなんだ」と見えてしまうことについてはいいことではないかも…。海外では、声掛けなしにお手伝いするとNoと言われることもあります。「自分は自分でできるのに、できないように見たくはない」ということなのではないでしょうか。相手に確認せず何でもお手伝いしてしまうことは避け、「できること」と「お手伝いの必要のあること」をきちんと聞くこと、伝えること、が大切です。指導者も「善意だから断れない」選手ではなく、「きちんと自分の考えを伝える」選手を育成していくことが必要です

クラス分け「S21」

国内では「障がいがある」と認定されている場合でも、国際大会で競技するためのクラスを付与されない場合があります。

障がいはあるが、最も軽度のクラスの定義にあてはまらないほど軽度の場合や、障がいの原因疾患等が対象でない場合、障がいの状態が一定でない場合などについては、クラスが付与されません。

国内大会では、S21として日本独自のクラスを設けています。ドイツやデンマークなど、国内大会を海外の選手にも参加可能としている、いわゆるオープン大会などでは同様の独自のクラスを設けている大会もあります。カナダやアメリカではIPCのS14(知的障がいのクラス)と別にスペシャルオリンピックのクラスを設けているような大会も見つかることがあります。

ネックレスやピアス、タトゥーなど…

日本国内のプール使用では、ネックレスやピアス等の装飾品は通常は身につけないように指導されることが多いと思います。国際大会では、宗教や信条により、ネックレス等をつけている、文化・風習によりタトゥーを入れている場合がありますので、競技会においても、ネックレス等を外す指示やタトゥーを隠すような指示をすることはありません(ただし、五輪マークなど商標登録されているロゴのタトゥーなどについては、広告規定違反になる場合があります、このマークを覆うための最低限のテープ貼付を許可することがあります)。



宗教上の理由やファッションのため、など、ネックレス着用は海外の大会では珍しくありません



タトゥーも、海外の大会ではいろいろなものを見かけます。五輪マークのタトゥーを隠さずに泳ぎ、失格になったケースもあります

お国が違えば…

選手宣誓と審判の宣誓



2014ジャパンパラ水泳競技大会開会式の選手宣誓

開会式と閉会式、日本の大会ではどちらかというのかたい雰囲気で行われますよ。日本らしさのひとつ、という感じでしょうか。

開会式には、選手宣誓のあることが多いと思いますが、海外の大会では、選手宣誓と併せて、競技役員も宣誓をするの見かけます。確かに競技におけるフェアネスを守るためには、関係する人たちはみんな「正々堂々と業務を全うすること」を約束する必要がありますよ。

国際の競技規則では、フィールドオブプレイでのコーチング行為やタッピングミス等においては、行為の主体はコーチや介助スタッフですが、選手が失格とされることがあります。国際のクラス分け規則においても、不正や不十分な協力については、選手だけではなく、コーチや介助スタッフについても言及されています。指導者としては、不正のつもりがなくても、自分の言動や行動で選手が失格になったりクラスを付与されなかったりするしないよう注意が必要です。何がどう判断されるのか、可能性も含めて、規則や規定をよく理解しておくことが肝要です。